



大賞 〈金の星賞〉

『金色きんいろのカメ』

埼玉県 浦和第一女子高等学校二年

上田

侑ゆき乃

(キーンコーンコーンコーン)

「起立！ 気をつけっ！ 礼っ!!」

学級委員の石川が、偉そうに大声でかけ声を出した。礼をしないやつはいないかと、自分こそ礼そっちのけで辺りをきよろきよろしている。嫌な奴だ。

「ありがとうございました——!!」

退屈な理科の授業が終わり、友達はみんな給食の用意に取りかかった。俺はずっと寝ていたけれど、やっと体を起こして机を持ち上げた。いつものように、前の席の井上明人あきとが机を俺のにくつつけながら、

「今日も俺、寝ちゃったよ」

と笑いながら話しかけてきた。

「俺なんかいつも寝てるよ」

「理科、あまり面白くないもんな。生き物の体の仕組みなんて知るかっての」
おお、今日の授業は生き物についてだったのか。明人はきつと寝たふりをしながら授業をちゃんと聞いていたのだろう。明人が最近高校生の兄弟に憧れて、わざと悪ぶっているのを俺は知っている。真面目な性格のくせに。

「ところで今日も、行くか？」

明人が声を潜めて聞いてきた。だから俺も、

「あつたり前だろ」

とささやきかけた。

「じゃあ、今日もお土産だな」

そう言って、俺たちは担任の先生に見つからないようにこっそりと、自分たちのパンを机の横の体操着入れに押し込んだ。

放課後、俺と明人は毎日学校裏の公園に寄って、カメが沢山いる池をのぞく。汚いけれど、結構大きな池。池の周りの半分はツツジの植え込みに縁取られていて、花が綺麗に咲いている。



俺はいつものベンチに座って、体操着入れから自分のパンを取りだした。池の正面におかれたこのベンチは池を見るには特等席だった。

「今日は、あまりカメ、いないね」

そう言いながら明人も、持ってきたパンをちぎっていた。明人は昔から生き物が好きで、特にえさをやるのが好きだった。将来の夢も、昔からずっと獣医だ。

「昨日の雨のせいかなあ。せつかくパンがあるのに」

見渡しても、池の緑の水面には波ひとつ起きていない。

「帰ろうかなあ」

明人ががっかりしてつぶやいた。

この池にはおそらく100匹以上ものカメがいる。縁日で売れ残ったカメをそっくりこの池に捨ててしまった人がいて、それが大繁殖したらしい。池の周りをぐるりと見渡すと、他にもうちの学校の生徒が沢山いて、それぞれに持ち寄ったパンを池に投げていた。えさをやりに来た子供達の中には、昔飼いきれなくなって捨ててしまったカメに会いに来る奴や、ただ単に人に懐いたカメが可愛いから来る奴もいる。俺も、そのうちの一人。カメだけならいいけれど、こうした子供達がカメにえさをやるうと頻繁に訪れるから、ついこの間池が給食のパンで覆い尽くされてしまうという事件がおきた。公園を管理する人達が学校に文句を言ったらしくて、本当はこの池に近づくのは禁止されている。明人は、この池に来る理由を（友達に会うため）だって言うていたけれど、ずっと一緒に来てるわりには俺はその友達に会ったことがなかった。

「そうだ、この間さあ、僕一人でこの池に来たんだよね。それで、よく見たらさ、池の底の方に、金色のカメが見えたんだよ」

突然明人がそう言った。今思い出したかのように言っているけど、なんとなく、言うか言わないかすごく迷ってから、意を決してしゃべっているように見えた。

「金色のカメ？ほんとに？」

「本当だよ。信じてくれなくてもいいけど」

嘘だなんて思っていないのに、明人が急に声をとがらせる。



「信じるよ。嘘だなんて思っていない。明人が見たんならいるのかもよ」
なんで急に怒ってしまったのか分からなかったから、急いでそう言った。
そうしたら、

「ホントに？」

明人の顔がぱっと輝いた。

「そう言ってくれるから僕、修しゅうのこと好きだなあ。実はね、結構前からそのカメの事は知ってたんだよ。僕の友達って、その金色のカメのこと。僕だけに懐いちゃって。亀吉って言うんだ」

今まで誰にも言ったことが無いのか、明人は興奮して続けた。

「僕と修との秘密だよ。なんかいいね、男同士の友情って感じ」

明人はにっと笑いながら、カメのためにちぎったパンを自分の口に入れた。
俺はちよつと恥ずかしくなって、

「そういえばさ、明人は最近、どうして授業中寝てるんだ。前はそんなことしなかったのに」

と聞いてみた。

すると今度は明人が照れたように、

「だってさ、なんかかっこいいだろ。授業中に居眠り。男って感じで」と言った。

「男男って、そんなに男らしくなりたいの」

「うーん、別にそういう訳じゃないんだけど、僕ももうすぐ中学生だからさ」
中学生と男に何の関係があるんだ。

「でも、授業聞かずに勉強もしないで、獣医になるって夢はいいのかよ」

「なんかさあ、僕獣医になれないと思うんだよね」

「なんで！」

「僕、視力悪くて、眼鏡かけてるし。兄ちゃんが、視力が悪いと手術とかで精密なことができないから、獣医には向かないって言うんだ」

明人は下を向いて、少し黙ってしまった。

「視力なんかで仕事は関係無いよ。諦めるなよ」

「じゃあ修、目の医者になって僕の目、良くしてくれる？ それなら大丈夫」

「無理。じゃあ諦めろ」

「なんだよそれー」



自分たちのやり取りが面白くて、二人で大いに笑った。笑いに笑った後、明人が言った。

「家で、父さんと兄ちゃんが、こういう会話をしてるんだ。僕、ちょっと憧れてたんだ。かっこよくて、いいよな。家では兄ちゃんに、お前は小さすぎて面白くないって言われる。今みたいなのが、男と男の会話だよな」

次の日学校に行くと、石川が俺と明人に話しかけてきた。

「修、明人、二人とも、昨日裏の公園にカメを見に来ていただろう」

明人とお互いにちらっと目配せする。明人の目は（どうしよう）と言っていた。

「行ったよ。なんで？」

と俺が認めると、石川は俺の答えにわざとらしく驚いて、

「なんでって。知ってるだろ。あそこに行くのは禁止だ。反省してないなら、先生に言うぞ」

と言った。ちえっ、学級委員だからって。

「俺たちがいたのを見たってことは、石川もいたんだろ」

「先生に言われたから。先生は、ちゃんと児童がああ池に近づいてないか、近づいてる子がいたら注意しなさいってさ」

このままじゃ、俺と明人は先生にこっぴどく叱られてしまうのだろう。今度こそ、本気で池に行くのを禁止されたらもう池には近寄れない。

「珍しいカメがいるんだよ」

急に明人がいった。

「金色のカメ。偶然見つけたもんだから、修にも見せたいと思って行ったんだ」

「金色のカメ？ 本当にそんなのいるのか？」

石川は半信半疑で聞き返した。

「僕は見たことあるよ。石川君、内緒にしてくれらるなら、今日一緒に見に行こう」

石川は自分が誘われるとは思っていなかったのか、今度は本当にちょっと驚いて、うーんとうなった。しばらく考えた後、



「分かった。今日一緒に行ってその金色のカメを見せてもらうよ。でも、そんなの嘘うそだったら本当に先生に言いつけるからな」と言っ、席に戻って行ってしまった。

放課後、俺と明人は本当に、石川を連れていつものベンチまでやってきた。石川は、

「なあ修、本当に金色のカメなんているのかよ。金だぜ、金」

と言ってきたが、なにせ俺もまだ見たことが無いので本当にいるのかどうかは分からない。三人ぎゅうぎゅうにベンチに座り、ただただ池にパンを放っている、明人が突然嬉しそうに声を上げて一点を指さした。

「ほーら来た!! あれだよー!」

明人が指さす方を見ると、確かに黄色っぽいものが浮かんでパンを飲み込んでいた。明人は持ってきていた網を取りだして、池に落ちないよう気をつけながらそおっとカメをすくい取った。

「これだよ、これ!! 僕が言っただの!! 僕の友達!」

明人の手の中にあるカメは少し小ぶりで弱々しかったけれど、ちゃんと生きていくカメだったし、何より本当に、これまで見たことが無いようなカメだった。

「金っっていうか黄色っって感じだな」

と俺が言うと、

「でも珍しい。ちょっと見せて」

と言っ、石川が明人から亀吉を奪い取った。

「あっちよつとやめてよ、石川君!」

「やめろつて、明人に返せ石川!!」

石川は俺たちの手の届かない高さに高々と亀吉をかかげ、足を引っ張った頭を引っ張ったりして、亀吉の体を調べていた。

そして、

「これは新種かもしれないよ、きつとー!」

そう呟つぶやいた石川の目は、興奮にららんと輝いていた。

「すごいよ明人、君はすごいよ。世界で初めて、金色のカメを発見した小学生だ!」



翌日。朝刊に、明人と、亀吉の写真がのった記事が出た。

(生き物大好き少年金のカメ発見！ 新種か!?)

昨日、明人の亀吉をひったくった石川はそのまま明人を引っ張って学校に戻り、理科の先生に亀吉を見せてしまったのだ。先生がいくら調べても亀吉に似たカメの報告はみつからなかったらしく、驚いた先生は色々な所に電話をかけ始めた。知らないおじさん達がぞくぞくと明人に会いに来て、写真をたっぷり撮られた後、こんなことになってしまっていた。

明人は、大人達に亀吉を取り上げられてしよげていた。先生が亀吉には沢山調べることがあるからと、明人に亀吉を返さずそのまま理科室で管理していたのだ。

石川は、明人が亀吉を発見したのを見届けた張本人であることに気をよくして、よく明人に話しかけていた。話の内容はもちろん、亀吉について。

「あと一ヶ月もすれば明人、ホントに表彰もんだぜ。金のカメだからな。これから血液検査や遺伝子検査とか、あと解剖とかされて、生命の神秘がまた解き明かされるってわけよ」

その日。俺はまた明人とふたりで、あのベンチに来ていた。明人はすっかり落ち込んでいた。

「修、僕のせいで、亀吉はここを追い出されちゃった。ここに来ても、もう亀吉がいないなんて、信じられないなあ」

「亀吉、色々調べられるんだろ」

「そうみたい。でもね、今はもう先生の部屋に閉じこめられてるし、どうしようもないよ」

そういつて明人がため息をついた。

「またここへ逃がしてあげたいなあ」

そのとき、ベンチに座っていた俺たちに、作業服を着た知らないおじさんが後ろから声をかけてきた。

「おーい君たち、この公園は今日からしばらく立ち入り禁止だよ。すぐ出て行きなさい」

「なんでですか」

明人が驚いてきく。



「あんまりカメが多くなって、子供も食べ物をなんでもかんでも池に投げるからね、あの池は埋め立てて新しくテニスコートを建てることになったんだよ。池に住んでいるカメたちは動物愛護団体に引き取られて、もっと暮らしやすい環境に移されることになったんだ。だから入っちゃだめなの。早く家に帰りなさい」

そんな。

市役所のおじさんは、カメ達の引越しの日や、工事の予定なんかを、わかりやすく丁寧ていねいに教えてくれた。カメの捕獲ほかく、明日から。池の水抜き、水曜から。池の埋め立て、その次の水曜から。

亀吉が引越させられて、他のカメ達と安全な所へ行くには、今日中に亀吉を取り返さないといけない。そして亀吉を池に放したら最後、もう会うことは出来ない。俺は、明人は泣くかなと思った。どっちにしても亀吉はあの池に住み続けられないから。

でも、明人は悲しそうな顔一つせず、まっすぐに俺を見据えて、

「修、亀吉を池に放したい」

と言った。明人の表情の激しさに圧倒されて、気づいたら俺はうなずいていた。

夕方から学校に忍び込み、俺たちは先生に見つからないようにして理科室を目指した。校則を破って学校に侵入するのは、俺も明人も初めてだった。ドアは鍵がかかっていたけれど、足下の木窓は鍵がないので引けば簡単に開いた。腹ばいになって滑り込み、素早く立ち上がって亀吉の水槽を探す。途中、カエルの解剖図とか人体模型とか、気持ち悪いものも沢山あって家に帰りたくなっただけけれど、とうとう亀吉の水槽を見つけた。亀吉は分厚い水槽の中でなんだかぐったりしているように見えた。明人は両手でそっと亀吉をつみこみ、俺たちはまた先生達の目をかいくぐって学校の外に脱出した。外はもう暗くなっていた。

夜の公園は思ったより怖くなかった。夜風が心地よい。街頭の明かりが、俺と明人の陰を黒く伸ばして、ちょっと不気味だったけれど。



池の端まで行くと、えさをもらえらると思つたのか二匹のカメが近寄つてきた。

「友達が迎えに来たんだ。良かったね、亀吉」

そういつて明人は手の中のカメを、ゆっくりと池に放した。

三匹のカメはそろつてゆっくりと池を潜もぐつていく。濁つた水に他のカメはすぐ見失つてしまつたけれど、亀吉の黄色い甲羅こうらだけはまだ浮かび上がつて見えた。なかなか消えないその甲羅が、明人との別れを惜しんでいるように見えた。

「明人、すごく男らしくつたよ」

「そう？」

明人がちよつと笑つて首をかしげた。

「うん、かつこよかつた。別に無理してかつこつけなくてもさ、かつこいいよ、明人」

俺がそういつると、しばらく俺たちは黙つてしまつた。

明人が、亀吉が消えてゆく水面を見つめながら、ぽつりと言つた。

「僕、やっぱり獣医の夢を捨てたくないんだ。修が励ましてくれたのもあつたけど」

俺が明人の顔を見ると、明人は泣きそうな顔をして池を見つめていた。

「僕、やっぱり生き物が好きなんだなあ、つて自分でも気づいたよ。亀吉が人間にいろいろ酷ひどいことをされると思つたら、いてもたつてもいられなかつたんだ。そりゃ、亀吉がもし本当に新種のカメだつたら、大人達に褒められて、賞状とかもらえちゃうかもしれないよ。だけど…」

そこまでいつると、とうとう明人は泣き出してしまつた。

「でもね、亀吉つていうあんなに綺麗なカメを見つけたのが僕だつてことは変わらない。一人だけだけど、他に誰も知らないけど、僕自身が知つてるから」

「明人だけじゃないよ」

しゃがみ込んでしまつた明人を見たくなくて、池を振り返りながらはつきりとした声でいつた。明人に聞こえるように。「俺だつてちゃんと知つてるよ。それと、亀吉も知つてる」



賢治のまちから
高校生★童話大賞

さよなら亀吉、元気でやれよ。きっともう二度と会うことはないのだろう。
明日から、俺と明人の放課後の寄り道はなくなるんだ。
急に視界がぼやけて、一瞬池から亀吉が顔を出すんじゃないかと思ったけれど、ほおを涙がつつただけだった。